

試験研究成果普及情報

部門	花植木	対象	普及
課題名：イヌマキ「紅くじゃく」の新梢をより赤くするために			
[要約] 春の新梢を安定して発色させるためには、多肥や冬季の加温を避ける。また、遮光は有効であるが、短期間ではその効果は期待できない。			
キーワード：イヌマキ、紅くじゃく、赤芽、新梢、発色			
実施機関名	主 査	農業総合研究センター 育種研究所	果樹植木育種研究室
	協力機関	農業総合研究センター	花き緑化研究室
実施期間	2003年度～2005年度		

[目的及び背景]

イヌマキ「紅くじゃく」は通常、春と秋の年2回、伸長時に新梢が赤くなるのが最も大きな特徴の品種で、2004年6月に品種登録した。苗は、県から許諾を受けた千葉県植木生産組合連合会が増殖を行い、2006年1月から販売が開始される。そこで「紅くじゃく」の特性を十分に発揮させるため、ポット苗を用いて、新梢がより赤くなる栽培条件等の検討を行う。

[成果内容]

- 1 冬季の加温は、新梢の生育促進には有効であるが、発色を悪くするばかりでなく、特に早期からの加温は、伸長・発色時期も遅らせる(図1)。
- 2 短期間(6ヶ月未満)の遮光では新梢の発色に効果が期待できない(写真1)。
- 3 樹全体の緑色と新梢の発色を考慮すると、基肥の施用量は培土1リットル当たりで、肥効調節型肥料(リニア型、140日タイプ、窒素：りん酸：加里=14:12:14%)5g、ようりん2gが適量(育種研究所基準量)である(写真2)。

[留意事項]

- 1 秋の新梢の発色については考慮していないため、それについては別途検討が必要である。
- 2 遮光は長期間(1年間程度)の場合に発色への効果が期待できる。この場合、遮光率は50%程度とする。
- 3 基肥の施用時期は前年の6～7月の鉢替え時。培土は小粒の赤玉土と腐葉土などを3：1程度の割合で配合する。
- 4 春の発色を良くするには、施肥は前年の鉢替え時の基肥のみとする。また、特にそれまで多肥で栽培していた株については、基準よりも施肥量を減らす。

[普及対象地域]

県下「紅くじゃく」栽培者

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

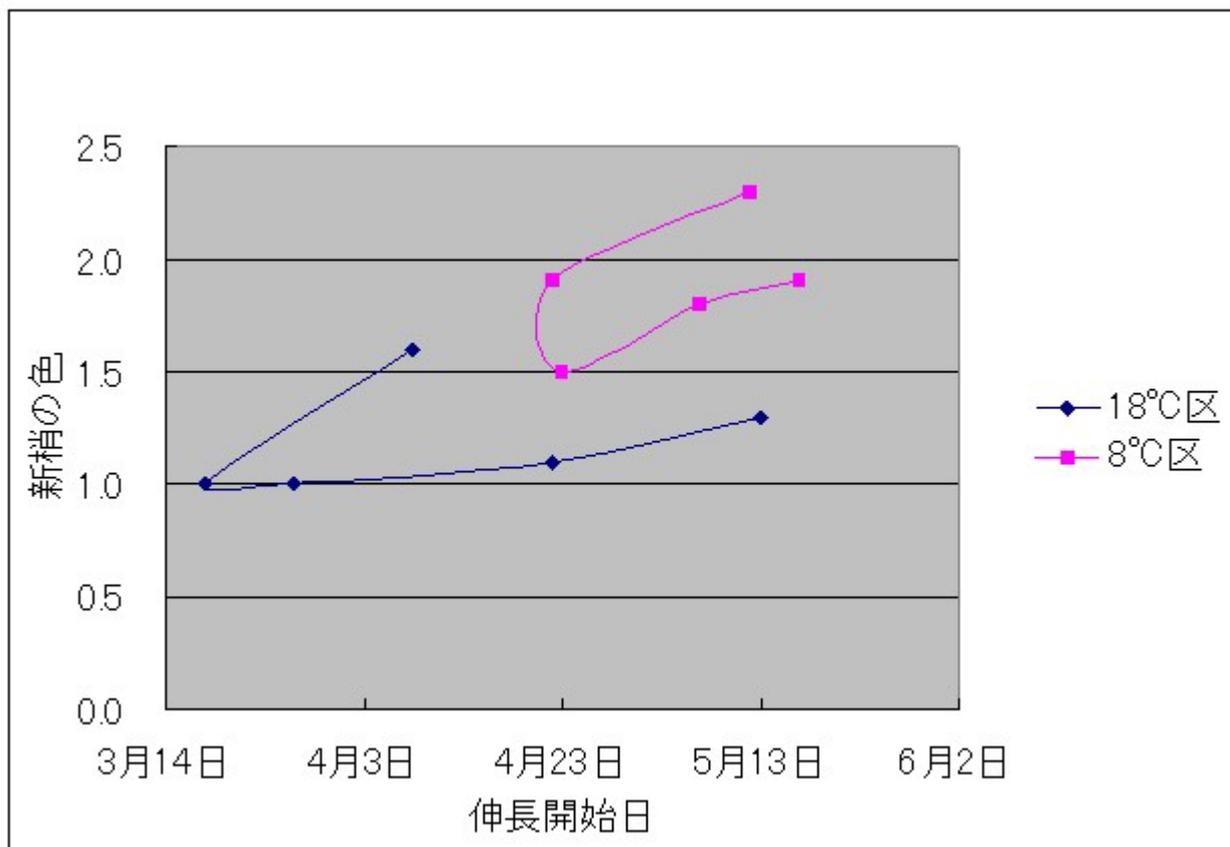


図 1 新梢の色と最低気温、生育期間との関係

注) 試験に用いた株はそれまで露地で栽培していたもので、約1ヶ月ごとにそれぞれの最低気温に設定した温室に入れた。また、各室とも天窓は25以上で開放するように設定した。入室日は、図中の線で結んだ点のうち、上から線に沿って順に12月19日、1月14日、2月13日、3月19日、4月19日である。無遮光区は伸長開始日が5月23日、新梢の赤さは2.8であった。また「新梢の色」は、新梢の赤さを0：赤み無し～3：濃い赤色までの4段階で評価したものの平均値である。

新梢の赤さ評価の基準



新梢の赤さ： 0



新梢の赤さ： 1



新梢の赤さ： 2



新梢の赤さ： 3



写真1 遮光率と新梢色との関係

注) 写真は、12月中旬から遮光を開始し、6月上旬に撮影したもの。無遮光区の新梢の赤色が、遮光区と比較して多少淡く見えるのは、無遮光区が若干早く伸長し、撮影時点でやや盛期を過ぎていたためである。発色盛期の状態で比較すると、各区間で差はほとんどなかった。

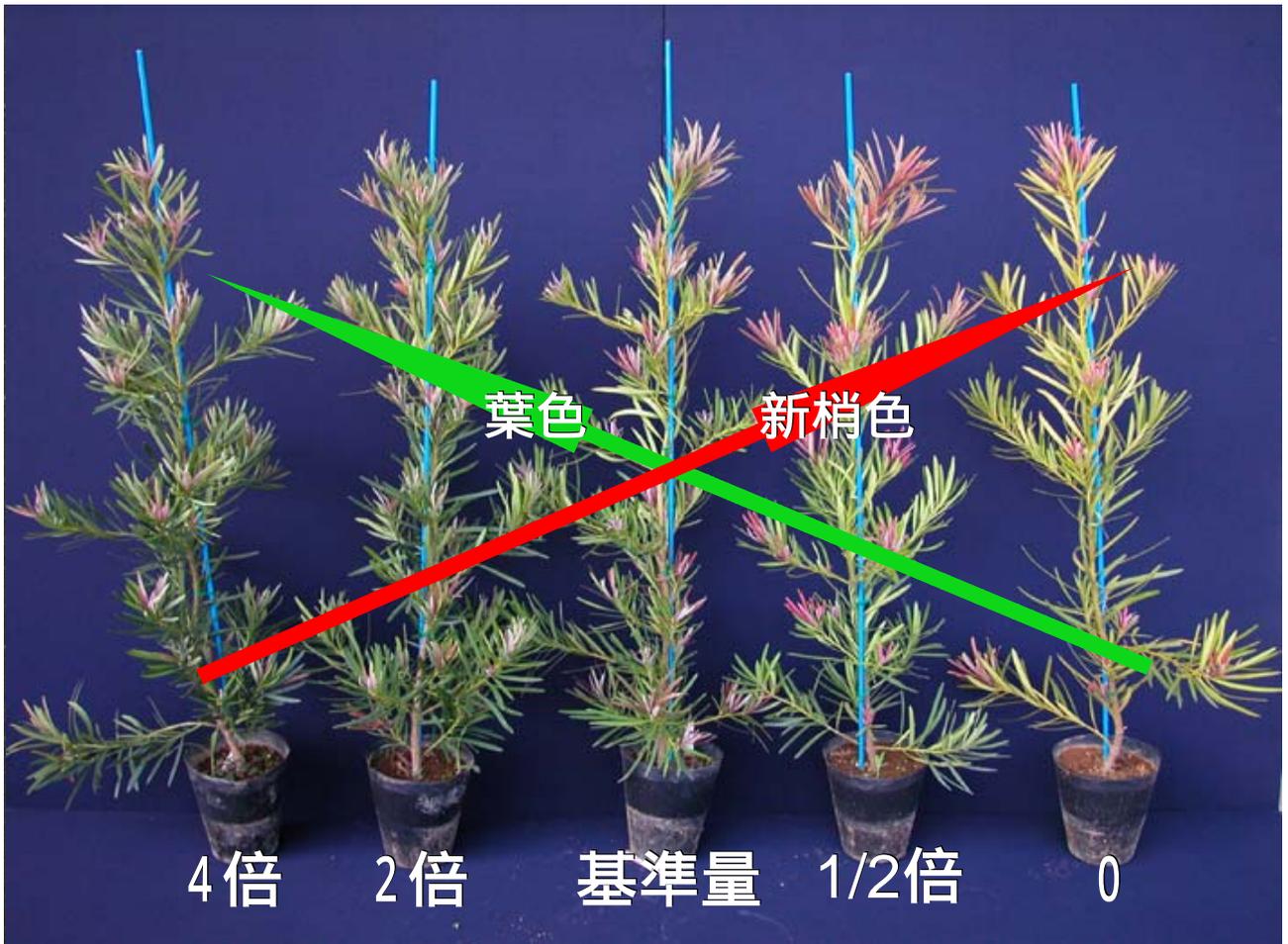


写真2 施肥量と葉色、新梢色との関係

注) 0、1 / 2 倍、2 倍、4 倍は、肥効調節型肥料の施用量を、基準量に対する
倍数で表している。なお、ようりんは各区とも 1 リットル当たり 2 g 施用。

[発表及び関連文献]

生産者向け指導資料として活用予定。

[その他]